様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006－2008
課題番号：18520235
研究課題名（和文）　アイルランド・英国・米国の現代〈詩〉劇にみる古典ギリシア悲劇・神話の翻案と現代化
研究課題名（英文）　Studies on Modernization of Classic Greek Theatre and Myth in Contemporary British, Irish, and American Poetic Drama and Theatre

研究代表者
堀　真理子　（HORI MARIKO）
青山学院大学・経済学部・教授
研究者番号：50190228

研究成果の概要：テロ、民族紛争、戦争、あるいは失業、貧困、犯罪、人種差別、性差別、環境汚染といった問題が地球的規模で浮上してきた過去一世紀に、そうした問題と取り組み、知と癒しを提供するべく、古典ギリシア劇・神話に人間の知の原点を求めて書かれた、アイルランド、イギリス、アメリカの劇芸術（詩劇、演劇、パフォーマンス）を取り上げ、具体的にどのように古典が翻訳・翻案され、いかなる社会的役割を果たし、美学的意義がそこに投影されているのかを考察した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,500,000	0	1,500,000
2007 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	570,000	3,970,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：英米文学

１．研究開始当初の背景

(1)　本研究は、堀真理子を代表とする青山学院大学学内の研究者４名から成り、いずれも現代英米詩・演劇を専門としている。欧米文化のルーツが古代ギリシアにあるのは言うまでもない。とはいえ、これまで個々の作家や作品のレベルで行なわれてきた古典ギリシア劇・神話との比較研究は多いが、それを包括するような研究は少ない。したがって、詩と演劇を専攻する研究者がジャンルを超えて共同研究することの意義は大きいと考えた。

(2)　本研究の 4 名の研究者は、それぞれが研究してきた詩人や劇作家が、①古典ギリシア劇や神話に深い関心を示し、その翻訳・翻案による劇・詩劇作品を書いていること、②古典ギリシア劇がそうであったように、二十世紀から二十一世紀にかけて移り変わる社会の状況を敏感に感じとって、社会的・政治的・文化的な批評として作品を再構築していること、③古典ギリシア劇の重要な構成要素

である舞踊やコロスを取り入れ、言語と身体の緊張のなかで美学的な効用を見いだそうとしていること、といった共通項があることから、アイルランド、イギリス、アメリカの現代詩人・劇作家たちがいつ、なぜ、どのように古典ギリシア劇や神話を翻訳・翻案によって現代化しているか、そこから浮かびあがる社会的・政治的・思想的・美学的・文学的・演劇的意義は何なのかという点を明らかにするために、共同研究を始めることにした。

２．研究の目的

(1)　現代欧米の詩劇が継承している古典ギリシア劇という伝統を、現代の詩人や劇作家の作品を通して考察するという共通目的を達成するために、詩を専攻する研究者と演劇を専攻する研究者が意見を交換しあい、詩人が詩劇を書く必然性を明らかにするとともに、劇作家や演劇人が表現する詩的言語を捉える方法を模索する。

(2) ギリシア劇・神話の翻訳・翻案作品、あるいは古典に通じる儀式性や様式性を備えた作品、さらにはそこに批評的ものさしを見いだす作品を通じて、古典的知が読み換えられることによって産出される現代的知がいかなるものかを明らかにする。

(3) テロ、民族紛争、戦争に対峙し、それをギリシア劇・神話の翻訳・翻案を通して解決の道を模索してきたアイルランド、北アイルランド、イギリス、アメリカの詩人・劇作家の作品に焦点をあて、古典の知を具体的にどのように継承・再構築しているかを考察することは必然的に、社会的弱者への強い共感を根底に、現代社会の権力関係を照射する作家や作品を扱うことになる。そうした社会的・政治的な意図をもって書かれた作品を取り上げることによって、現代に生きるわれわれが抱える問題の所在を明確にし、権力の布置が芸術を通していかに組み替えられるか、芸術の可能性や意義について考察する。

(4)　現代の詩劇・演劇・パフォーマンス作品が古典ギリシア劇を継承あるいは再構築する意図の根底には、古典が完成度の高い劇芸術のモデルであるという意識が働いている。したがって、社会的意味付けだけでなく、美学的意義と効用について考察することも本研究の重要な目的である。

３．研究の方法

(1)　アイルランド、イギリス、アメリカの詩劇、演劇、パフォーマンスにおいて、古典であるギリシア悲劇・神話を翻訳・翻案し、古典の様式性・儀式性に新たな意義を見いだし、古典に照らしての現代解釈が試みられている作品に焦点を当てた。３年という期限の制約を考え、4 名の研究者それぞれが扱う現代作家の作品の源であるギリシア劇および神話を限定し、その劇・神話について論じられた批評や翻案・翻訳作品を集めてデータベースを作成しつつ、一部論考を発表・出版することにした。具体的には代表の堀真理子は『メーデイア』を、分担者の佐藤亨は『アンティゴネー』、外岡尚美は『アンティゴネー』、伊達直之は『オイディプス王』連作を中心に研究を進めることにした。

(3)　研究の進め方のモデルとして、George Steiner の著書 *Antigones* を基礎文献として読み、論じ合った。Steiner によれば、「原アンティゴネー」は存在せず、『アンティゴネー』はさまざまな解釈を通して、すなわち「重ね書き（パリンプセスト）」でしか存在しえない。このことは翻訳・翻案の存在意義を重視し、忠実な翻訳を求める姿勢の無意味性を強調する。現代詩人・劇作家・パフォーマンスアーティストが古典の読み替えをすることに社会的・政治的・思想的・美学的・文学的・演劇的意義を見いだす、という本研究が意図することは Steiner のこの概念によって強固なものとなった。また、『アンティゴネー』を現代の人間が読む場合には収容所や独裁政権、警察国家という連想を免れないという Steiner の今日的な政治的・思想的解釈は、本研究の翻訳・翻案作品解釈に有効である。このほか、古典学者による翻案作品についての論考、たとえば Marianne McDonald, *The Living Art of Greek Tragedy* や McDonald & J.Michael Walton,*Amid Our Troubles:Irish Versions of Greek Tragedy* を、古典と現代の翻訳・翻案作品を比較・対照するさいのモデルとして参考にした。

(4)　以上をふまえたうえで、4 名の共同研究者がさらに、どのような方法でどんな作品について研究を進めたかを簡単に述べる。

　堀は主としてエウリピデスの『メーデイア』が現代アイルランド、イギリス、アメリカの女性劇作家によってどのように翻訳・翻案されているかを個々の作品に照らして考察し、父権的社会に対して投げかける今日のフェミニスト的視点および社会的弱者の視点について考察した。

　外岡は主として『アンティゴネー』を中心に、2001 年アメリカで起こった同時多発テロ事件をめぐる文化的･政治的言説と演劇との関係をたどり、古典ギリシア劇が翻案・変換されることによって対抗的言説を構成す

る可能性を考察した。
佐藤は主として『アンティゴネー』の北アイルランドにおける翻訳とその意義を、トム・ポーリンの『騒擾取締令』(1984)とシェイマス・ヒーニーの『テーベの埋葬』(2004)にたどった。両作品とも紛争を背景としているが、和平プロセスの進展など、社会状況の変化に応じ、古典劇の現代に放つ意味も変化するという点をとくに強調した。
伊達は主として W.B. イェイツによる『オイディプス王』連作の翻訳・翻案を対象とし、戦争と民族国家自立運動の二十世紀的状況下で、イェイツがアイルランドと英国の演劇に復活させようとした、言語身体的な審美体験の共有と土着的な共同態意識の融合の意義を、同時期の彼の日本の伝統芸能「能」への関心とともに対照して考察した。

４．研究成果

(1)　アイルランドの演劇に古典ギリシア劇・神話の翻訳・翻案が多い点については、すでにアメリカのギリシア劇研究者である Marianne McDonald がその著書や論文で強調してはいる。しかし、W.B.イェイツ、シェイマス・ヒーニー、トム・ポーリンといった詩人が具体的に作品のなかで意図した社会的役割や美学的効用について、同時代の第一次世界大戦や北アイルランドの民族紛争との具体的な相互関係として跡づけた、綿密な分析や記述は未だなかった。伊達、佐藤を中心に行なった調査と、これに基づき各種の学会誌および雑誌論文等で提示した、作品と時代背景との実証的な相互的関係の分析は、作品を生み出す状況と作品が生み出す状況を動的かつ包括的に捉える文化批評の可能性をも示唆し、国内外の文学研究に新たな視点を提示している。また伊達は、これら現代化された古典ギリシア劇のコロスや仮面、舞踏の身体的諸要素が、同時代と以後のモダン・ダンスの動向に与えた、異ジャンル間の関係にも着目した。

(2)　アメリカでは昨今、ギリシア劇を翻訳・翻案した上演舞台が増殖傾向にあるが、その背景には二十一世紀に入ってからのアメリカの国家権力、すなわちブッシュ政権による「テロとの戦い」「キリスト教右派」「規制緩和政策」などがもたらした戦争と貧困や差別の問題への反発があげられる。それらに対する演劇的批判のありようはこの政権が末期症状を見せ始めた昨今、ようやく論じ始められたところである。したがって、この問題に取り組んだ本研究の成果はこの分野での先駆的な意味をもつ。具体的な成果として、外岡は、同時多発テロの死者を国家的犠牲者として祭りあげようとする国家と埋葬されえぬ「不在の死体/身体」とのギャップをマック・ウェルマンの舞踊劇『アンティゴネー』を例に論じ、哀悼のレトリックのもとに表象不可能な個々の死が国家的記憶にすりかえられることの脅威と、それに抵抗する演劇的身体の可能性を提示した。堀は、社会的に差別され、経済的に搾取されながらも自尊心を失わずに抵抗する女性主人公にメーデイアを重ね合わせた、スーザン・ロリ・パークスの『血は流れて』やシェリ・モラガの『飢えた女』、ヴェリナ・ハス・ヒューストンの『混沌の家』などを例に、国家を「非場所」あるいは「無場所」と捉えることによって、父権制社会が抱える限界を超えることの可能性をアメリカの有色人女性作家が提示している点に着目した。

(3)　イギリスではギリシア劇や神話を現代化することによって、現代社会が抱える暴力を前景化するサラ・ケインやティンバーレイク・ワーテンベイカー、あるいはキャリル・チャーチルのような女性作家を輩出した。フェミニズム的な視点に立っての現代社会批判、男性の論理的思考を壊す意図をもった実験性などはアメリカの劇作家にも影響を与えてきた。堀はこれらイギリスの女性作家、そしてアイルランドの女性作家マリーナ・カー（カーの『猫沼のほとりで』は『メーデイア』の翻案作品である）について調査・研究を進めている。

(4)　以上のように、4 名の共同研究者はそれぞれが得意とする分野から調査・研究を行なったが、現代劇・詩劇はこのグローバル化時代、同じ英語圏の国同士、国境を越えて上演（ときには他国で初演）され、出版され、一定の評価を得ている。古典の現代化という共通テーマで互いに影響しあい、共同制作も可能にしている現在、ローカルなメッセージがグローバルなメッセージとして再発信され、美学的な意味での古典再構築の方法が国境を越えて現代のさまざまな劇作家や詩人、パフォーマンスアーティストや舞踊家に継承されている。それらの共通項の探究はもちろんのこと、社会の変化とともに新たに構築された社会的メッセージや美学的概念・審美的体験の発見は、共同研究によって触発された。その成果の一部は、本研究の共同研究者 4 名のほか 3 名を加えて執筆した共著『ギリシア悲劇と能の再生』に顕著に現れているが、今後さらに共同研究の成果を発表していく所存である。

(5)　本研究を進めるにあたって、古典ギリシア劇とその翻訳・翻案作品およびそれらの

作品についての批評書や研究書をデータベースにまとめる作業を行なった。時間的な制約を考え、この３年間では基本的な図書のほか、『アンティゴネー』『オイディプス王』『コロヌスのオイディプス』『メーデイア』『ピロクテーテス』に関する図書や雑誌のデータを収集した。今後さらに他のギリシア劇に関する図書や雑誌のデータベースを作っていく予定である。また、脚本化されていない一回性の古典翻訳・翻案作品の上演も数多く、３年間の研究で行なったデータベース作りではすくいきれなかった部分もあるので、今後そうした積み残した作品にも目を向けていく予定である。

(6)　最後に本研究に関わる、近年の海外での研究動向について記述しておきたい。劇作家が古典ギリシア劇の翻訳･翻案を通して古典的な英知を現代に生かそうとしている
いっぽう、近年、海外の研究者たちも古典ギリシア劇の翻訳・翻案研究に着目している。アメリカでは最近、古典ギリシア劇・神話を題材に翻案劇を書いているエイソル・フガートやウォレ・ショインカといったアフリカの劇作家や、デレク･ウォルコットをはじめとするカリブ海域出身の劇作家の古典再構築の意義について書かれた論考や研究書が複数出版されている。2009 年 3 月にロサンジェルスで行なわれた比較演劇学会では、古典翻案についてのパネルが複数あったほか、アイルランドの代表的劇作家ブライアン・フリールの作品とウォレ・ショインカの作品を、ショインカ自身が参加し比較検証するというワークショップが学会の最後を飾って催された。国境を越えての古典の現代化研究の重要性は、いままさに注目されている領域であると言える。能においては本歌取りにも似た伝統があるように、またT.S.エリオットが知性の源を古典の引用に求めたように、今日また古典への里帰りが文学をその衰退から救い、現代に英知をもたらす道であることを作家が、批評家が、研究者が再確認し始めたのだろう。本研究はまだ始まったばかりであるが、今後さらにこの研究を続け、国内外に発信し、同じテーマに興味をもっている作家や研究者と交流していくつもりである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　12　件）

(1) 伊達直之「シェイマス・ヒーニーの詩、あるいは記憶の家（特集：記憶）」『八事』第 25 巻（2009）121-125 頁。
(2) 佐藤亨「アセンダンシーのジレンマ――サミュエル・ファーガソンの『アイルランドのプロテスタントの頭と心の対話』（一八三三）をめぐって」青山学院大学英文学会『英文学思潮』第 81 巻（2008 年 12 月 30 日発行）49-63 頁。査読無。
(3) 佐藤亨「歌のアイルランド化について――‘Shananndoah’を手がかりに」日本アイルランド協会『エール』第 28 号（2008 年 12 月 25 日発行）18-31 頁。査読有。
(4) 外岡尚美"Art and Urban Space: *Rent*, the East Village, and the Construction of Meaning," *The Japanese Journal of American Studies* 19 (2008), 139-157.査読有。
(5) 伊達直之「W.B.Yeats の象徴体系と自然――ささやかに交感する詩と自分の身の置き場」『水声通信』第 4 巻 3 号（2008 年 4 月発行）86-93 頁。査読無。
(6) 伊達直之「プロパガンダ・インテリジェンス･20 世紀イギリス文学――外国人作家たちのプロパガンダ、インテリジェンス活動への対応（第一次大戦）」*Proceedings* 80 (2008), 143-145 頁。査読無。
(7) 堀真理子「文化的記憶の回復をめざすチカーナ作家シェリ・モラガ――『母』の歴史を作る」青山スタンダード教育機構『青山スタンダード論集』第 2 号（2007 年 1 月 16 日発行）275-296 頁。査読無。
(8) 佐藤亨「ヒーニーのエリオット論――‘Learning from Eliot’を読む」*T.S.Eliot Review* 第18号(2007)33-43ページ。査読有。
(9) 伊達直之「W.B.Yeats――土地に籠めた象徴と身体的リアリティ：戦時下の国家、家、故人観から」『イェイツ研究』第 38 号（2007 年）38-48 頁。査読無。
(10) 佐藤亨「Seamus Heaney――‘Forge’」『英語青年』第 1886 号（2006）36-37 頁。査読無。
(11) 佐藤亨「『花はどこへ行った』――北アイルランド紛争と反戦歌」『エール』第 26 号（2006）92-107 頁。査読有。
(12) 外岡尚美 "Specters of History: Ana-chronistic Politics in Tony Kushuner's *Angeles in America," Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar August 1-August 3, 2005,* (2006), 237-246. 査読無。

〔学会発表〕（計　9　件）

(1) 佐藤亨 "Two Versions of *Antigone* in Northern Ireland: Seamus Heaney's *The Burial at Thebes* [2004] and Tom Paulin's *The Riot Act* [1984]" International Association for the Study of Irish Literature's Annual Conference. 2008 年 7 月 31 日（ポルト大学）

(2) 伊達直之「外国人作家たちのプロパガンダ、インテリジェンス活動への対応＜第一次大戦＞」日本英文学会大会シンポジウム。2008 年 5 月 24 日（広島大学）
(3) 佐藤亨 "The Burial at Toomebridge: Seamus Heaney's *Antigone*" IASIL-JAPAN (国際アイルランド文学協会日本支部)。2007 年 10 月 28 日（神戸親和女子大学）
(4) 伊達直之「第一次大戦と W.B.Yeats が描いた国民像」英語圏文学研究会。2007 年 9 月 8 日（青山学院大学）
(5) 伊達直之「ロンドンの中で異国をイメージする Hugh Selwyn Mauberley――パウンド」日本エズラ・パウンド協会（日本ヴァージニア・ウルフ協会、日本ジェイムズ・ジョイス協会共同シンポジウム）。2007 年 10 月 27 日（駒沢大学）
(6) 伊達直之「W.B.イェイツのバラッドと地誌の詩――「歌枕」の象徴手法と詩人の身体の場所」オベロン会。2007 年 12 月 22 日（国際文化会館）
(7) 佐藤亨「ワークショップ：再び、『煉獄』をめぐって」(日本イェイツ協会)。2006 年 9 月 16 日（慶応義塾大学）
(8) 佐藤亨「シンポジウム：Ｔ．Ｓ．エリオットとシェイマス・ヒーニー」(日本Ｔ．Ｓ．エリオット協会)。2006 年 10 月 7 日（弘前大学）
(9) 伊達直之「イェイツとロレンスの国家観」日本イェイツ協会大会シンポジウム（日本ロレンス学会共同シンポジウム）。2006 年 9 月 8 日（慶應義塾大学）

〔図書〕（計　１　件）
(1) 堀真理子・佐藤亨・外岡尚美・伊達直之・中條忍・村田真一・廣木一人著『ギリシア劇と能の再生――声と身体の諸相』水声社（2009 年 3 月）総頁数 295 ページ。

６．研究組織
(1)研究代表者
堀　真理子（HORI　MARIKO）
青山学院大学・経済学部・教授
研究者番号：５０１９０２２８
(2)研究分担者
佐藤　亨（SATO　TORU）
青山学院大学・経営学部・教授
研究者番号：４０２４５３３７
外岡　尚美（TONOOKA　NAOMI）
青山学院大学・文学部英米文学科・教授
研究者番号：１０２２７６０５
伊達　直之（DATE　NAOYUKI）
青山学院大学・文学部英米文学科・教授
研究者番号：３０３１６８８０

(3)連携研究者
なし